

「つたえること・つたわるもの」№191
『三浦綾子の「病い」と「神さま」』をコラム
に書く——というミッション

健康ジャーナリスト 原山建郎

★三浦綾子さんの人生をテーマにした講座

これまで数年にわたって、文教大学オープン・ユニバーシティ（社会人向け教養講座、越谷・湘南・東京あだちキャンパスで、春学期の5～7月・秋学期の9～12月に開講）で、『遠藤周作の「病い」と「神さま」』シリーズを通して、「〈苦しみ〉をともしする永遠の同伴者、イエス・キリスト）について、受講者の皆さんといっしょに考えてきた。

2024年度の講座ではさらに、遠藤周作さんの帰天（1996年9月29日）から2年後、夫を身近で見守ってきた順子夫人の著書『夫の宿題』などを参考にしながら、遠藤さんが「ダブダブの洋服（西洋から伝えられたキリスト教）を日本人の身丈に合った和服（日本人が共感を持って受け入れるキリスト教）に仕立て直す」という思いで書かれた小説、『沈黙』、『侍』、『わたしが・棄てた・女』などの代表作を改めて読んだ。とても充実した2024年だった。

そして先月、文教大学地域連携センターから、来年（2025年）度の講座計画の提出を求められた。添付書類には、満80歳を迎えた年度が「講師の定年」との記述があった。私は2025年1月、満79歳を迎える。いよいよオープン・ユニバーシティの講座もあと2年となった。ここはひとつ、気合を入れていこう。

まず、一つ目の講座は、「〈ひらがな〉のちから」シリーズである。先月（11月13日）に亡くなった詩人、谷川俊太郎さんは、『こどもあそびうた』（童話屋、2018年）などの美しい「ひらがな詩」で大人も魅了したが、改めて「〈ひらがな〉のちから」を見直したい。

講座のテーマは、『美しい日本語 その1——「あたたかく」伝わる〈ひらがな〉のちから』（前半5回）と『美しい日本語 その2——「やさしさ」を伝える〈ひらがな〉のちから』（後半5回）を考える講座である。

そして、二つ目の講座には、遠藤周作さん（カトリック）に引き続いて、やはりキリスト教（プ

ロテスタント）作家の三浦綾子さんを取り上げることにした。三浦綾子さんは、作家としてデビューする3年前・1961（昭和36）年、婦人雑誌『主婦の友』が募集した「婦人の書いた実話」に応募した『太陽は再び没せず』（筆名・林田律子）が入選し、翌1962（昭和37）年『主婦の友』1月号に掲載された。

その後、1964（昭和39）年7月、朝日新聞の懸賞小説に応募した『氷点』で入選を果たした、同年12月から翌年の11月まで1年間、新聞小説として掲載されて、一躍、有名作家の仲間入りをした。

さらに、1966（昭和41）年に日本基督教団出版局発行の月刊誌『信徒の友』に連載した小説『塩狩峠』以降、三浦綾子さんの小説や随筆などの作品はすべて口述で行い、夫の三浦光世さんがそれを筆記（浄書）する、文字通り「二人三脚」の文筆（口述・筆記）生活だった。

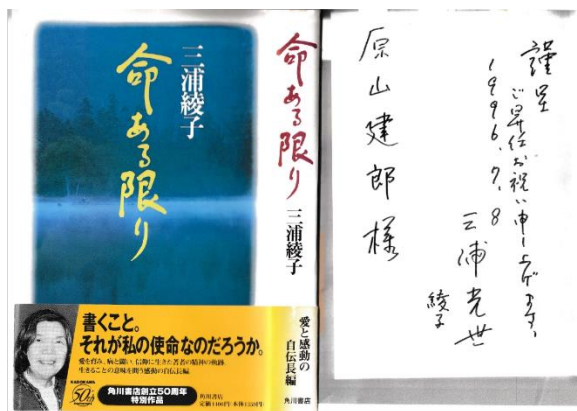
遠藤周作さんを支えたのが妻・遠藤順子さんであったように、三浦綾子さんが1999（平成11）年10月12日に昇天されるまで、ともに40年の人生を支え励ましてきたのが、夫の三浦光世さんである。今回のコラムでは、三浦綾子さんを「綾子さん」、三浦光世さんを「光世さん」と呼ぶことにしたい。ちなみに、綾子さんは、夫・光世さんのことを、著書では「三浦」と呼んでいる。

これまで本コラムでも、私が遠藤周作「からだ」番記者であると書いたが、じつは私が主婦の友社に入社した1968（昭和43）年の秋、『主婦の友』編集部読物課に配属された新人記者に与えられた任務の一つが、綾子さんから郵送されてくる自伝小説『道ありき——青春篇』（1967年1月号～1968年12月号連載）の原稿受け取り補助（先輩記者の指導下で「前号までのあらすじ」を書く）だった。さらに『この土の器をも——結婚偏』

（1969年1月号～1970年12月号連載）を引き続き担当するというご縁があった。その後も、旭川市の綾子さんのご自宅を訪問して、光世さんとも親交を結ばせていただくことになった。

2025年度の講座には、遠藤さんを取り上げた講座と同じタイトルを冠した、『三浦綾子の「病い」と「神さま」その1——「挫折」が拓いた綾子の人生』（前半5回）と『三浦綾子の「病い」と「神さま」その2——「愛」を生きた綾子と光世』（後半5回）である。

講座計画を立案するにあたって、三浦さんの自伝『命ある限り』（小説を書き始めて30年間の歩み）を改めて読み直した。1997年、三浦夫妻の献辞・署名入りの同書をいただいた。献辞の「ご昇任お祝い申し上げます」は、恥ずかしながら、この年の6月、主婦の友社の取締役役に就任した私へのメッセージである。「三浦光世」署名の脇に「綾子」と書かれた署名は、綾子さんの自筆である。



↑『命ある限り』表紙。三浦夫妻からの献辞

この『命ある限り』は、『石ころのうた（幼年時代）』、『草のうた（少女時代）』、『道ありき（青春時代）』、『この土の器をも（結婚生活5年間の記録）』につづく五冊目の自伝（文筆生活30年）で、作家としての綾子さんの「挫折・苦悩・決心・覚悟・堅信」、そして「夫・光世さんへの限りない感謝」がつつられている。

同書のなかで、とくに印象に残った箇所（一部）を引用しながら、「原罪」と「赦し」をメインテーマに書きつづけた綾子さんの「覚悟」と「感謝」について考えてみよう。

★『氷点』は入選する——光世さんの予言

綾子さんが作家デビューの第一歩となった小説、『氷点』が、朝日新聞の懸賞小説に入選する一年前の夏、光世さんは「綾子、この小説は入選するぞ」と予言していた。また、入選したことで有頂天になるのではなく、まず「神」に感謝の祈りを捧げ、さらに肅然と「神を畏れねばならない」と自戒する様子が描かれている。

一九六四年七月十日早朝、店（※当時、三浦綾子・光世夫妻が営んでいた旭川市内の雑貨店）の雨戸がドンドンと激しく叩かれた。何ごとかと驚いて雨戸を開けると、朝日新聞の配達人がニコニコとして、

「おめでとうございます」

と、一抱えもある朝刊を二十部程、どさりと置いて行った。起きてきた三浦と共に、私は小説「氷点」入選の記事を読み始めた。が、三浦が気がついて言った。

「ああ、綾子、先ず感謝の祈りをしよう」

私は姿勢を正し、板の間にべったりと坐って、神に感謝の祈りを捧げた。思えばその前年の夏頃、

「綾子、この小説は入選するぞ」

と、三浦はきっぱりと予言したのだった。それが正しく現実となって、この朝日新聞の大きな記事となり、今日の前に置かれている。

「神を畏れねばならない」

肅然として、二人は自分たちの写真が大きく映っている新聞に再び目をやった。

（『命ある限り』第一章 「氷点」が懸賞小説に入選 8ページ）

★『氷点』の賞金、一千万円は……

懸賞小説『氷点』の賞金は、当時は破格の1000万円。新聞報道でそのことを知った見知らぬ人たち——九州から北の果て至るまで、幾人も借金の申し込みがあった。綾子さんは、この1000万円の使途とその思いに触れている。

（※「氷点」の入選を喜ぶ）客は連日のように私たちの家を訪れた。三浦の兄がそれを聞いて言ったという。

「おれは、予選通過と聞いた時、なるべくなら一等にならんようにと願っていた。（※結核での療養生活が長い）体の弱い二人が、忙しさに巻きこまれたら、たまったものではない」

私はこれまたありがたい言葉だと思った。多くの人々の話題は「どんな小説を書いたか」ではなくて、一千万円という巨額の賞金に集中していた。三浦は、いかにも三浦らしく、

「一千万円の賞金をいかに使うかは、入選の確信が得られた一年前から、神に導きをお願いしてある」

と、どこまでも静かであった。序（ついで）に「いえば、一千万円はあつという間に私たちの前から消えていった。先ず国税地方税合わせて四百五十万円を払わねばならなかった。残金の十分の一は教会に捧げられ、更に二百数十万円が私の父の借金の支払いに当てられた。この借金は、私の十三年に及ぶ療養中に積み重ねられたもので、常々三浦が「親孝行する金は必ず神が与えてくださる」と言っていたとおりに、全く神から与えられたとしか言いようのない形で、弁償されることになった。その他は、他教会や今までお世話になった多くの方々へのお礼として使わせていただいた。三浦にも新しい服の一着もと思ったが、「わたしのためには何も要らない」と、頑として受けなかった。

『命ある限り』第一章 「氷点」が懸賞小説に入選 11 ページ)

★「そんなに貧しかったかなあ」

綾子さんの自伝、著者紹介欄には、「家が貧しかった」と書かれている。先の引用にも「(綾子さんの13年に及ぶ)療養中に積み重ねられた、父の借金の返済にあてられた」とある。ここでも、光世さんが示す「無類のやさしさ」が、綾子さんを支えている。

私がものを書き始めて間もない頃であったと思う。すぐ下の弟が言った。

「綾ちゃん、おれたちの家、そんなに貧しかったかなあ」

無然とした語調に私は驚いた。私は講演にでも随筆にでも、「私の家は貧しくて……」という言葉を度々使った。そしてそれは私の感じた、私から抜くことのできない事実だったのである。だが姉にしても弟にしても、わが家を金持とは思わないにせよ、わざわざ貧しいと告げなければならぬほどの状態であったとは、思ったことがないようであった。子供は十人いたが、死んだ妹を除いて七男二女、皆一応は中等学校に通わせてもらっていた。その授業料は、必ずしも所定の日に毎月支払い得なかったにせよ、経済的理由で中途退学を余儀なくされた者がいたわけではない。(中略)

客間には床の間と違い棚がついて、茶の間にも床の間があった。(中略)確かに弟の言うとおりに、「そんなに貧しかったかなあ」という疑問が当然でもあった。多分私の中に、教科書以外の本を

一冊も買ってもらわなかったこと、人形や玩具を一つも買ってもらわなかったこと、修学旅行にも行けなかったことなど、そうした意識があつて、私は自分の家を貧しいと思っていたのであろう。

(中略)

私がこんなことを書く気になったのは、あの家は父にとって、どんなドラマが秘められた家であったのか、娘としてもっと細やかな愛情で、父の苦労を思いやってもよかったのではないかと、という気持ちに改めて揺り動かされたからである。

私の長年の療養のために、父は年々借金を増やしてきた。「この上は家を売らなければ借金を返せないな」という言葉も聞くようになった。その父の言葉を、私から幾度か聞かされていた三浦は、その都度言った。

「お父さんの借金は綾子が支払なさい。親孝行をする金は神がくださる」

私は三浦の答にいつも感動させられていた。普通妻の実家の借金など、聞いても聞かぬふりをするか、最初からひらきなおって、

「娘のお前には、何の責任もないことだろう」

と言われるところかも知れない。が、三浦はそんなことは一言も言わなかった。三浦は「借金がいくらあるのか」とも聞かなかった。神が支払ってくださることを信じて、びくともしなかった。そしてそれは驚くべきことに実現した。小説「氷点」の受賞によって、既に書いたとおり、支払うことができたのであった。二百二十万円もの借金であった。賞金を受けると、何よりも先に三浦は、その額を父に渡してくれた。私は感動した。神を信じて疑わなかった三浦の信仰に感動した。露ほども疑わずに祈って来た三浦の信仰に、応えてくださる神が現実にいられることに、私は感動した。

『命ある限り』第三章 「氷点」が大ブームに 51～54 ページ)

★「学生はみんな死んでしまいました」

『氷点』の入選後、毎回読み切りの新聞小説の執筆がスタートした。主人公や登場人物の描き方を工夫すべく、綾子さんと光世さんは、北海道や本州など各地に取材旅行に出かけた。

そのひとつが、1954(昭和29)年9月、台風15号で沈没し、1139名の乗客が犠牲となった「洞爺丸事故」の取材である。

翌日、青森港を午後十二時半に発ち、午後四時半に函館に戻った私たちは、直ちに朝日新聞函館市局を訪ね、西田一郎記者から台風当時の模様を聞いた。そして洞爺丸遭難現場の七重浜に赴いたのであった。

翌五月三日は西田記者に渕上巍（ふちがみたかし）教授を紹介され、立待岬附近の喫茶店で同教授より遭難の生なましい体験を聞いたのである。

（中略）

（現実とは凄い！）

私は胸をつらぬかれる思いがした。それともう一つ、小さな描写が私の心をぐいと捉えた。船から放り出された教授が、荒波に翻弄されて七重浜に打ち上げられようとする海水の中で、波がその顔をこする時、まつ毛がぴりぴりと震えたと教授は言った。私は驚嘆した。まさに死に直面して、人間はこうまで自分の置かれた状況を客観視し得るものであろうか。もしかすると、この人の体験は特別のものではないか。私は稀有な人と、今巡り合っているのだという感動で、次々と語り出される言葉を心に強く焼きつけて聞いた。むろん取材ノートを手にはしていたが、話に惹き入れられて、十分な記録はできなかった。が、私は小説「氷点」の中に、渕上教授のその夜の多くの体験を、主人公辻口啓造の体験として使わせてもらうことにした。

この渕上教授の初印象は暗かった。それまで私の知っている人々の中で、その暗さは類のないものであった。が、その暗さがどこから来ているのかを、私はまもなく知った。教授はゼミの学生たちと、研修旅行のために洞爺丸に乗りこんだのであった。

「まあ！ 学生さんと一緒だったのですか。幾人助かったのでしょうか？」

尋ねる私の顔を、教授は押し返すように見えた。

「助かったのはわたし一人です。学生はみんな死んでしまいました」

（『命ある限り』第二章 取材旅行 39～40 ページ）

渕上教授の「助かったのはわたし一人です。学生はみんな死んでしまいました」という言葉は、のちに「国家権力の不条理に翻弄された教師の人生」を描いた小説『銃口』（1981年）のように、それは太平洋戦争のさなか、小学校の代用教員として行っ

た軍国主義の教育を、戦後、罪悪感と絶望を抱いて退職した綾子さん自身が、かつての教え子に対して抱いた慙愧の念と、何か通ずるものがあったのではないだろうか。

★「女中さんなら撥ねられてもいいのか」

さきに、光世さんの「無類のやさしさ」を紹介したが、もうひとつ、光世さんが示した「自らへのきびしさ」にも大変感動した。それは、洞爺丸事故の取材旅行先での出来事である。

翌五月四日は、函館は雨だった。私はいち日部屋に寝て三浦の看護を受けた。三浦は一心にマッサージをしたり、持参のテルミー（温灸）療法を施してくれた。この日私は三浦に言葉鋭く叱られた。何をかうためだったかは忘れたが、係の女性に何かを買って来てもらおうと思って三浦に言うと、自分で行って来ると三浦は言った。私はその三浦に、

「雨も降っているし、車にでも撥ねられたら大変だから行かないで。女中さんに頼んでよ」

と言った。途端に三浦は顔色を変えた。

「係の女中さんなら車に撥ねられてもいいと言っのか」

三浦はさっさと部屋を出ていった。不案内の街でうろろして事故でも起きたらと、私は只（ただ）三浦のことだけを思ったのだ。この三浦の言葉を今も時折思い出す。

（『命ある限り』第二章 取材旅行 41 ページ）

「今日が、私の命日だと思って生きています」

かつて、旭川市のご自宅をお訪ねしたときの綾子さんの言葉——揺るぎない「堅信」と「覚悟」——の響きに、深い感動がよみがえる。

間もなく傘寿を迎える2026（令和8）年まで、あと2年——『三浦綾子の「病い」と「神さま」』についてコラムを書く——というミッションは、いま始まったばかりである。